

主日礼拝7月24日(日)

題 「神の僕として行動する」

テキスト：ペトロの手紙一 2章11～17節

皆さん、おはようございます。

今日の聖書の個所ではペトロは、離れ離れになったキリスト者たちに、「神の僕として生きよ」と勧めています。

11:愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。

この教えはすべての人にあてはまることだと思います。

ペトロは、今離散しているキリスト者は、この世では「いわば旅人であり、」「仮住まいの身」であると言っています。最終目的地は輝く天の都だということです。

またこの地上にあっては「魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。」と言っています。この「魂」という言葉は、原語のギリシア語では「プシュケー」ということばです。この個所のことばは、多くの日本語訳の聖書では「魂」と訳されていますが、「いのち」と訳した方が良いとの説もあります。多くの日本人は、魂は人が死んでも残る大切なもの、と考えられているように思えますが、皆さまはどう思われるでしょうか。聖書では、神さまに与えられた「いのちの息」を表す「霊」は出て来ますが、魂はあまり触れられていないようにも思います。わたしは、魂は神さまに与えられた大切な「心の根っこ」「心の肝」のように思えるのです。

ともかく人間は地上を生きている間、この大切な魂・いのちに戦いを挑む肉の欲が襲ってくるのです。わたしたち人間は誰でも欲望、罪、エゴイズム、自分中心の思いを持っているからです。ですから、こどもから大人までその力との戦いがあるのです。ガラテヤの信徒への手紙5章19節(P350)によれば、次のように言われています。

19:肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、

20:偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、

21:ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのものです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。

22:これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、

善意、誠実、

23:柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。

24:キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。

25:わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。」と勧められています。

イエスの十字架の愛によってわたしたちの心に戦いを挑んでくる肉欲から解放され、人は喜びと平和の中を生きるようになれるのだと言われるのです。もし誘惑を感じたら「イエスさま助けてください。」と祈ることが助けになります。

続いて、

「12:また、異教徒の間で立派に生活しなさい。」とあります。

「立派に生活しなさい。」とは、偉くなりなさいとか、人より優れた者になるかではなく、それは良い事かもしれませんが、イエスを覚えて生きる者たちは、特に生活している場所で節度を保ちながら、わたしたちの行いや振る舞いが自然に人から好感をもたれるような行動であること。まわりの人たちからできるだけ親しまれる人柄を身に着けていくことも大切なことだと思われます。笑顔を大切にしたいものです。

「そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります。」

「訪れの日」とは、神の最後の審判の時ということですが、神さまによって、すべてのことが明らかになる日が来るということです。力を持っている地上の権力者がいくら隠そうとしてももう隠せなくなる日が来るのです。

キリスト者である、教会に通っているということ、地域や団体からたとえ一線を引かれても、たとえ良く言われないことはあったとしても、必ずやがて評価を受ける日が来るという希望があるのです。

キリスト者は天の都を目指してこの世では数々の困難や試練はありますが、天国への希望を持って日々を感謝しながら生きて行きたいと思うのです。

わたしは毎朝の食事の前に、サラ・ヤングさんの「わたしの希望が あなたを 永遠にまもる」という本のことばを少しづつ読んで、慰められたり気づかされたりしています。

この本は、神さま、イエスさまが直接語りかけてくださっているような書き方になっているのです。最近読んだことばを紹介します。

「人間の五感の中では、視覚がいちばん重要視されることが多い。わたしはこの世界を輝くばかりに美しく創りあげた。だから、その美しさを目にする時は

十分に鑑賞して、愛でてほしい。ところが、視覚よりもさらに有益なのは希望であり、**それ自体が一種の視界なのだ。希望はあなたに～～心の目を通して～～まだ来ていないものを見させてくれる。**そのもっとも感嘆すべき例は、天国の希望だ。あなたの究極の定めはわたしの栄光にあずかることだから！これが、わたしが十字架の上で成し遂げた業と復活によって確実にしたあなたへの約束である。」とあり、はっとさせられ、うれしくなりました。

さて、ペトロが手紙を出したキリスト者の群れの、悩み、課題は人間がつくった制度との関わりでした。現実的には、国家や法律、規則との関わりです。状況によっては国家とどのような関係を持ったら良いのかという深刻な問題でもあります。

ペトロは「**13:主のために、**すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、」「**14:あるいは、**悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい。」と呼びかけています。

これは伝道者パウロの書いたローマの信徒への手紙13章（p292）の言葉とも重なりあっているように思えます。

約2000年前、当時の考えでは、国家は正しい事、善を行ない悪を取り締まるのだ、つまり国家は間違いを犯さないのだという考えがあったのです。しかし、今日までの世界の歴史を見る時に、国家が数々の間違いや悪を犯して来た事実があることは、多くの人知っているのです。国家はいろんな理由をつけて外国を侵略することもあります。今のロシアのウクライナへの侵略を思います。かつてのドイツのナチス、ヒットラーによる侵略もありましたし、残念ながら日本もかつて朝鮮や中国アジアの国々を侵略した歴史的事実があるのです。日本は戦争に敗れ、そのことを反省して現在の日本の憲法が出来たのです。世界中、どこの国の国家も間違いを起こすことがあるのです。昔であれば、国家のやり方に物を言うことはできませんでしたが、現在は特にヨーロッパやアメリカなど先進国と言われる国々やそして日本の国の一番大切な規則である憲法では国民が国家の間違いに堂々と自由に意見をいうことは国の規則で認められているのです。いわゆる、これが民衆主義国家というものなのです。人類の長い苦しみの歴史を経て現在があり、未来があるのです。わたしたちは、聖書を学ぶと共に歴史を学ぶことが大切だと思わされます。

国家に対するわたしたちのあり方を考える時、わたしは今日の聖書の個所の17節のことばを大切にしたいものだと思わされます。

「17:すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れ、皇帝を敬いなさい。」

昔、黒柳徹子さんは、人にインタビューをする時、どんな人に対しても同じような言葉づかい態度をされる方だと聞いたことがあります。

これは、ほんとうに美しい態度だと思わされました。自分もそうありたいと。また、歴史を見ると、世界の歴史を見ると最強国家であったローマ帝国も滅び、日本の歴史では驕る平家も滅びました。多くの国家は滅んで来たのです。ほんとうに敬い畏れるべき方は、神ご自身ただ一人です。愛なる神さまを畏れる、その事を私たちの心の肝、魂に命じておくことは正しい人生を歩む上で肝心なことだと思わされるのです。

神さまは天と地をお創りになった唯一の方です。そして愛する独り子イエスをこの世に、わたしたちの罪と死からの救いのために送ってくださった方なのです。そして目には見えなくても今も共にいてくださる方、わたしたちが死を迎える時にも共にいてくださるのです。そしてととこしえにいてくださるのです。

その事を知って、受け入れることが出来るということは何と幸いなことでしょうか。神さまから元気を与えられ、希望を持って、今日からの一日一日を大切に生きて行きたいと願います。

皆様の上に主の平安を祈ります。